

聖書：創世記 12：10～20

説教題：私の妹だと言って

日時：2023年6月25日（朝拝）

神からの召命を受けて信仰によって神に従う新しい人生に出発したアブラム。その彼が今日の箇所では思わぬ状況に投げ込まれます。彼は前回の箇所ではハランを出発してカナンに入り、まずシェケム、次にベテルとアイの間、そしてネゲブの方へと約束の地の北から南までを歩きました。そしてネゲブの方へ行った時のこと。そこで激しい飢饉に見舞われます。食べ物が手に入らなくなるという事態に直面します。さてどうしたら良いのでしょうか。ここから、神に従っていけば苦難はないというわけではないことが分かります。アブラムは神に従って約束の地までやって来たのに、そこで食べ物が手に入らなくなりました。私たちがアブラムの立場にあったらどう思うでしょう。神に従ってここまで来たのにどうしてこんなことになるのか。神に従ってここまで来たのは間違いだったのか。神は最初はお声をかけるが、後は見守ってくださらないのか。私を見捨てられたのか。そのような考えが頭に浮かんで来てもおかしくなかったのではないかと思います。そういう意味でこの状況はアブラムにとって信仰のテストとなるものでした。信仰の旅に出発したアブラムは早速その信仰が試されることとなったのです。

さて彼はこの状況でどう行動したのでしょうか。10節に「アブラムは、エジプトにしばらく滞在するために下って行った」とあります。まずこのエジプト行きはどう考えたら良いのでしょうか。聖書の他の箇所を読むと、エジプトへ行くことそれ自体は必ずしも悪ではないことが分かります。ヤコブは後に創世記 46 章で全家族とともにエジプトへ下って行きます。また新約聖書でもイエス様の誕生後、父ヨセフと母マリアはイエス様を連れてエジプトへ一時逃れました。そういう実例も考慮するとアブラムのエジプト行きも同じように考えられるのでしょうか。しかし今あげた二つの例と今日のアブラムの場合とは大きく異なる点があります。それはヤコブのエジプト行きも、またイエス様とその両親のエジプト行きも、神からの明確な言葉があったということです。それに対して今回のアブラムのエジプト行きに関しては主からの言葉がありません。12章 1～3 節でカナンの地に向かう時には主の言葉があったのに、今回に関してはそれが記されていないのです。また前回はアブラムが行くところ行くところで祭壇を築き、神を礼拝したと記されていましたが、今回はそれもあります。つまり神

に祈り、神との交わりの中で、この決断をしたようには書かれていないのです。当時の多くの人々にとって飢饉が起こったらエジプトへ行くというのは自然な考えだったかもしれません。しかしアブラムはカナンの地を受け継ぐため、この地にやって来ました。そういう場所を、神との相談もなく、簡単に離れて良いものでしょうか。これは困難な状況にぶつかって信仰によって歩む生き方をやめてしまったアブラムの姿を描いているものと言えるのではないのでしょうか。

この彼の決断が信仰と祈りによっていないことは 11 節からも伺えます。アブラムはエジプトの地に入ろうとする際、一つのことが心配でした。それは妻のサライが美しい女性だったため、自分は殺されてしまうのではないかということでした。それにしてもサライは何歳だったのでしょうか。後の 17 章 17 節から、アブラムとサライは 10 歳差であったことが分かります。そしてアブラムがカナンに行くためにハランを出たのは 75 歳であったと前回の 12 章 4 節にありました。とするとサライは 65 歳よりは上だったと考えられます。なのにアブラムが心配するほどサライは見目麗しい女だったと言います。当時の寿命は今日より少し長く、サライは 127 歳まで生きましたので、当時の 65 歳は今日の 40 代に相当した可能性はあります。アブラムはそこで「私の妹だと言ってほしい」とサライに言います。「そうすれば、あなたのゆえに事がうまく運び、あなたのおかげで私は生き延びられるだろう」と彼は言いました。もしエジプトに行くことが神に従う道だと確信していたなら、こんな工作は不要だったのではないのでしょうか。ここからも彼が信仰によって歩んでいたのではないことが伺われるわけです。突然の困難を前にして人間的な恐れが先立ち、主に信頼するよりも自らの知恵によって何とか乗り切ろうとしたアブラムであったことが見えて来るのです。

さてその結果はどうだったでしょう。14 節にある通り、エジプトに行くと、エジプト人はサライを見て、非常に美しいと思いました。予想通りです。しかし思わぬ展開が生じます。何とエジプトの王ファラオの高官たちがサライを見て、ファラオに彼女を薦めたのです。もちろんこれはアブラムがサライを「私の妹だ」と言っていたからに他なりません。アブラムとしては自分を兄ということにしておけば、誰かがサライに言い寄って来ても色々理由をつけて断ることができる。そうして時間稼ぎをしている間にエジプトを離れることができるようになるだけでも考えていたのでしょう。しかしファラオの高官たちを追い払うことはできなかつたようです。彼女は独身なんだ

から問題ないでしょう？ファラオの妻になれるなんてこれほど光栄なことは他にないでしょう？などと迫られて、あれよあれよという間にエジプトの宮廷へ連れて行かれたのです。こうしてサライはアブラムから引き離され、彼女はもはや彼の手の届かないところに行ってしまったのです。

その代わりアブラムには沢山の贈り物が贈られました。16 節にある通り、「羊の群れ、牛の群れ、ろば、それに男奴隷と女奴隷、雌ろば、らくだを所有するように」になりました。「物事は彼女のゆえにうまく運んだ」とありますが、果たして本当にうまく行ったと言えるのでしょうか。富を豊かに持つ者になったとしても愛するサライは他の人の妻になってしまいました。また神の約束はどうなるのか。主はアブラムにカナンの地を与えるとっておられたのに、アブラムはこのままエジプトで暮らすことになるのでしょうか。特に子孫の約束はどうなるのでしょうか。自分たちから子孫が出て、偉大な国民が誕生するという約束は立ち消えとなるのでしょうか。こうして始まったばかりのアブラムの信仰の生涯は、開始早々ジ・エンドとなりかねない危機的状況が生じていたのです。

そんな中、主なる神が行動してくださいました。17 節に「しかし、主は」とあります。主は「アブラムの妻サライのことで、ファラオとその宮廷を大きなわざわいで打たれ」ました。悪いのはアブラムなのに、なぜファラオの家が打たれたのかと思うかもしれません。確かに悪いのはアブラムです。しかしアブラムに災いが下ったところで何の解決にもなりません。そこで主はファラオとその家に災いを下されたのです。これによってファラオは何か自分たちに問題があると気づくようになります。そして詳細は分かりませんが、実は妻として召し入れたサライがアブラムの妻だと知るようになります。そこでアブラムを呼び寄せ、このように言います。「あなたは私に何ということをしたのか。彼女があなたの妻であることを、なぜ私に告げなかったのか。なぜ、『私の妹です』と言ったのか。だから、私は彼女を自分の妻として召し入れたのだ。」アブラムはこうして非難され、恥を受けることになりました。本来周りの人々に祝福をもたらす者として神に召されたのに、全く反対のことをしてしまっています。祝福どころか迷惑をかけています。そしてこのように教え諭されています。顔を上げることもできないアブラムです。そして妻を連れてここを立ち去れ！とわれます。本来アブラムに与えられた持ち物は没収されてもいいはずですが。むしろペナルティーを科されても良いはずですが。しかしファラオは自分たちに害をもたらすアブラムと彼

に関わるすべてのものを少しもその国に残したくなかったのでしょうか。持っているものの全部を持って出て行け！と言います。こうして彼は妻と所有するすべてのものを持って送り出されたのです。

以上の箇所から私たちは今朝何を学び取れば良いのでしょうか。まず今日の箇所が語る第一のポイントは、アブラムの不信仰にもかかわらず、主なる神はアブラムへの約束を成就するため、彼とその妻サライを守ってくださったということでしょう。今日の箇所のアブラムには信仰の観点から誉められるべきところはありませんでした。彼は妻サライをこのままファラオに取られて終わりとなってもおかしくありませんでした。それによって神の約束はおしまいとなってもおかしくありませんでした。しかし主なる神はそうなることを許しませんでした。神はアブラム夫婦を守り、ご自身が与えた約束をなお保とうとされました。これはただただ神の恵みによることです。アブラムの立派さには少しもよっていません。アブラムへの主の約束が成就されるのは、一重に主のおかげであることをこのエピソードは私たちに示しています。

しかしこのことはだからと言って私たちの歩みはいつでも良いということにはなりません。アブラムは結果的に守られたとは言え、この間、多くの祝福を失いました。彼は信仰によって生きることをしなかったこの間、いつもハラハラしていました。その心に平安や確信はありませんでした。次の瞬間どうなるかいつも不安と恐れで心は一杯でした。そして自分が想像もしていなかった展開に慌てふためきました。彼はこの間、主の臨在を味わう祝福を失っていました。また愛する妻を一時的とは言え、他の人に取りられてしまいました。アブラムはこのことでどんなに耐え難い苦しみを味わったことでしょうか。取り返しのつかないことをしてしまったという思いで苛まされ、生きた心地のしない数日間を過ごしたのではないのでしょうか。また彼は主の召命に生きることができませんでした。良い証しができませんでした。祝福を周りにもたらすどころか大変な迷惑をかけてしまいました。そのことで当然のように叱られ、大いに辱められることになりました。

しかしある人は思うかもしれません。それはそうだとしても、これは随分軽い罰だったのではないかと。結果的に彼は元の祝福の位置に戻されています。こんな程度で彼が犯した罪が赦され、処理されて良いのかと。確かに一見、神はアブラムの罪を軽く扱い、あるいは見過ごしているようにさえ思えます。しかし結論から先に言えば、

その罪の処理はキリストにおいてなされるということでしょう。アブラムが犯した罪はアブラムの生涯においてすべて清算されるわけではありません。いくらかはその代償を払ったとは言え、真の精算は彼がより頼んだキリストにおいてなされるということです。あのアブラムもキリストを必要とした人でしたし、神が将来与えてくださる救い主による贖いを信じて救われた人だったのです。

私たちもその点で今日の箇所のアブラムと同じではないでしょうか。果たして自分が犯した罪の代償を自分の人生ですべて支払っている人などいるでしょうか。私たちもこれまで自分が犯した罪の代償をきちんと払っていないのに、他者から見て分不相応な恵みに生かされているという現実があるのではないのでしょうか。そんな私たちのいわば尻拭いをしてくださるのはキリストです。私たちも今日の箇所のアブラムと同じです。ただ神の恵みによって生かされています。キリストにおいて完全に代償を支払ってくださる神の恵みによって救われる者です。

私たちにとって大事なことは、その恵みに生かされている者として、自分が犯した過ちから学んで本来あるべき生き方へと立ち戻って行くことではないでしょうか。次回見る 13 章 1～4 節に目をやると、アブラムは本来あるべきところに戻って行きます。13 章には再び祭壇が出て来ます。主への礼拝が戻って来ます。主の御名を呼び求める祈りの生活が戻って来ます。私たちもアブラムのように不甲斐ない姿をさらけ出し、そのことで災いを自らに刈り取るような者ですが、そんな者をなお顧みてくださる神の恵みをいただいて、あるべき歩みへ何度でも悔い改めをもって立ち戻る者でありたいと思います。私たちの信仰はこれからも幾度となく試されるでしょう。神は私たちをそのように訓練されます。その神の取り扱いの中で、私たちは過去の過ちから学んで、今度は人間の知恵によってではなく、神に信頼する道を行く者でありますように。神は真実なお方です。今日もイエス・キリストにある恵みによって私たちを支えてくださっています。その神に感謝し、神に信頼して従う生活をもって、周りの人々に災いではなく、祝福をもたらす者とされたいと思います。そしてこのような神とともに歩むこの上ない幸いを、私たちの生活と言葉を通して周りの方々に証しし、神の召命に応える生き方をする者へとさらに導かれて行きたいと思います。